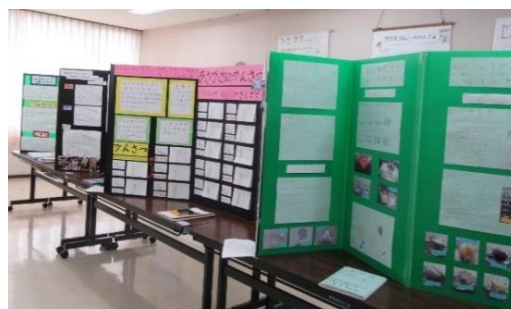


第 14 回南砺市小・中学生科学展覧会

9月15日(土)、16日(日)の2日間、井波総合文化センターにおいて第14回南砺市小・中学生科学展覧会を開催しました。市内の小学校より79点(低学年22点、中学年28点、高学年29点)、中学校より36点が出品されました。今年度も、「○○の研究パート△」等、数年にわたり継続して研究している作品、身近な生き物や自然、環境等をテーマとして研究する作品、工夫された題名が付いた作品が多く見られました。



授賞式の際に、審査委員長の城端中学校、溝口校長先生より、「研究の発想力、手段の工夫、まとめる表現力、意外な結果が出て『どうしてか』とそこからさらに考える力」等の大切さをお話いただきました。

来場者の皆さんは、子供たちのがんばりに感心しながら、丁寧に作品を見ていかれました。2日間の来場者は、昨年度より約80名多い、約560名でした。

審査の結果、以下の作品が優秀賞に選ばれ、内5点が10月19日(金)～22日(月)に富山市の科学博物館で行われる県科学展覧会に出品されます。

＜ 優 秀 賞 ＞				
作 品 名	学校名	学年	名 前	県出品
せかいにひとつだけのかぼちゃをそだてよう	井波小	2	小嶋 康生	
大きくなあれ！ ぼくのミニトマト	福光東部小	2	山越 朋貴	○
小さな虫のけんきゅうパート3 ～ダンゴムシ、ワラジムシ、フナムシの動きのちがいをさぐる～	井波小	3	今藤 光希	
スーパーボール研究パート3 ～ボールが弾むひみつ調べ～	井口小	4	柳田 赳澄	○
ゴム動力ヘリコプターを作ろう ～パート2～	福光中部小	5	大島健太郎	
グラスハーブのヒミツをさぐる！	福野小	6	往蔵 千穂	○
ダンゴムシの「交替性転向反応」の観察	吉江中	2	山下 和輝	
パンの発酵についての研究 part3	福野中	3	鶴居 成美	○
電気 Part7 -卒業編- 風力発電に挑戦しよう	吉江中	3	花木翔士也	○
"World is cylindrical ～円柱形の秘密を探る～	吉江中	3	山越 太陽	

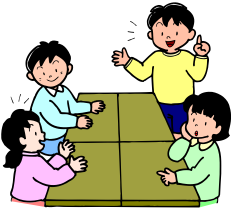
桜クリエで行われた石田秀輝先生の講演会に行きました。6年生の国語科「自然に学ぶ暮らし」の筆者です。シロアリの巣に学んだ空気調節、トンボの羽の仕組みを生かした風力発電機等、未来の社会に向けての発明等の提案に目から鱗です。「すごい」「どうなっているの」と心動かされるものとの出会い、注意深い観察力、試行錯誤の取組、関連付けて考える力、他者へ発信する力等、小中学生科学展覧会での作品にもあふれていました。子供たちの鋭い感性、追究力を大切に、日々の授業の中でも鍛え、育てていきたいですね。(松井)

教育センターだより

南砺市教育センター

「学習課題設定」と「教師の判断・決断」

南砺市教育センター 所長 松永 和久



7月下旬に、全国学力・学習状況調査の結果が公表されました。

過去順位が低かった沖縄県は、徐々に全国平均比マイナス幅を縮小し、今年度は小学校の3種で全国の平均正答率を上回りました。なぜ、沖縄県の学力が上がってきたのでしょうか。

「教育ジャーナル2018 7月号(学研)」に、「沖縄県の学力向上の取組」の特集として、取組の一つに、「『**問い**』が生まれる授業づくり」が挙げてあり、次のことが書かれていました。

なぜ「問い」なのか＝子供たちは主体性を発揮している授業では共通して、子供が追究したいという「問い」が生まれています。「問い」をもつということは、・・・(中略)・・・必要な力であると考えています。(P16)

私はこれを読み、**見える学力・見えない学力どちらも向上する大きな要素は、「問いをもつことだと再認識させられました。**これは、「**学習課題を自分のものにする**」ということに置き換えられると思っています。

教育センターだより第40号で、消防の追究を力強く進めた美貴さんや和夫君の姿を書きました。私は、その要因の一つが、「**学習課題(当時は「学習問題」)を自分のものとした**」からだと思っています。実は、私は美貴さんたちの意に合う学習課題を設定せざるを得なかったのです。

当初、私の考えていた学習課題は「井波大火はまた起こるか」でした。そのため、井波大火の当時の写真を拡大提示する、井波大火で焼失した範囲を大きな地図に表して提示する、地域の方に井波大火の話聞くなどの手立てをとりました。当時の私は、「これだけのしかけをしたんだ。子供

たちは絶対に恐ろしい井波大火を2度と起こしてはいけないという意識を根底に、消防の追究を進めていくはずだ」と信じていました。

ところが、子供たちの感想をみると、「自分の家が火事にならないか心配だ」「自分の家が火事になったらどうすればよいのか」(これら子供たちの「問い」とします)など、子供たちの意識は井波大火そのものではなく、自分の家にあったのです。私は、この学習課題では子供たちの追究が進まない、学習にならないと困ってしまい、当時の研究主任の先生に相談しました。そして、二人で夜遅くまで子供たちの感想を分析した結果、学習課題を変える結論に達しました。新たな学習課題は、「自分の家は大丈夫か」です。この学習課題で追究することを子供と共通理解しました。もし当初考えていた学習課題で進めたならば、美貴さんたちは受け身の学習を強いられ、つらい日々を送っていただろうと想像します。

20世紀初頭の教育学者のウィリアム・ウォードは、次のように言っていたそうです。

平凡な教師は言って聞かせる。よい教師は説明し、優秀な教師はやってみせる。しかし、最高の教師は子供の心に火をつける。

私は、美貴さんたちのような子供を目の当たりにした経験から、沖縄県の問いをもつ授業に共感しつつ、**子供が本当に追究したいと思う学習課題であることが、学力向上に欠かせないことだと強く思っています。**それは、**子供の心に「自ら学ぼうとする火」をつける**からです。同時に、それは研究授業だけではなく**日々の授業で実践**することが大切で、**学習課題を設定(変更)する教師の判断・決断にかかっているのだ**と思います。